

ころの“皆殺し”と“焼き尽し”に他ならなかった。ベトナム戦争は、アメリカ側の宣戦布告のない、非合法的なベトナム侵略に対する、反植民地戦争、反帝国主義戦争であり、侵略に対する、やむなき当然の戦いであった。何故なら侵略者であったアメリカの「独立宣言」にもうたわれているように、生きる権利、自由の権利、幸福を求める権利をまもるための戦いであったからだ。ベトナム独立宣言の冒頭には、アメリカの独立宣言が引用されている、まさに歴史の皮肉といえよう。戦後の侵略戦争における最大のヴァンダリズムは、このベトナムに対する侵略であろう。しかし、現代のヴァンダリズムは、基本的人権の擁護、民族の独立と自由の前に敗北せざるをえなかった⁽⁶⁾。

核兵器

近代戦争、とりわけ第一次、第二次世界大戦は、世界中にその兵器力の甚大さをみせつけた。まさに質と量において、現代ほど殺人兵器の発達した時代はあるまい。そしてそれは刻一刻と加速度的に発達している。とりわけ核兵器の出現は、従来の軍事の様相をかえさせ、人々の価値観を根本的にゆさぶった。可能性には、実在的可能性と抽象的可能性がある。100年前、いや50年前人類は自らの破滅を予想しえただろうか。確かに歴史上侵略や戦争等によって、ある民族が絶滅したり、激減したことはあったようだが、地球上からの「人類の滅亡」は、核兵器の出現によって抽象的可能性から実在的可能性に転化した。その「確実性」をいち早く察知したバートランド・ラッセルでさえ、「不可避免的に、遅かれ早かれ、人類という種族の絶滅にいたります」⁽⁷⁾と述べるに至り、いくつかの紛争解決の方法を提起している。

広島市平和公園内にある平和記念館、原爆資料館を訪ねると、そこに「人類滅亡」の縮図をみることができよう。人は誰も、その光景に目をそらすにちがいない。だがそこには人類の蛮行—現代のヴァンダリズムの傷跡が残っているのであって、決して目をそむけてはならない「事実」であろう。今日世界中には、世界の全人類を殺戮してなお数十回分の核兵器が蓄積されているという。アメリカに於ては、1日に3発の割合で核兵器が生産されている。米ソを頂点として核兵器を主軸にした軍備競争は、通常兵器、核兵器、核兵器運搬手段、軍事衛星等において、確実に増大してい

る。例えば、広島型原爆は重量が4トン爆発力が12キロトンであるが、近代的なアメリカのICBM弾頭は、重さが100キログラムほどであるにもかかわらずTNT20万トン(200キロトン)⁽⁸⁾に相当する爆発力を有している⁽⁸⁾。それが数万発、数百万発蓄積されていると言われている。従ってその結果、「戦争の危険はひとつの可能性にとどまるだけではなく、その蓋然性は時がたった分だけ合計されて増大し、もし採るべき方策を見出すのに成功しないままに十分な時間が経過するならば確実性となる」⁽⁹⁾のである。

理論と実践において、理論の敗北は実践の敗北をもたらし、実践の敗北は理論の不十分さを実証するものである。核兵器の廃絶の方法について、今だ明確な解答は出ていない。しかしだからといって諦念主義・運命論に陥ってよいものか。少なくとも自らの生命が、何の宣告もなしにうばわれるのである。これ程の歴史上最大のヴァンダリズムを人類は許しえるのか。否、許すことは自らの破滅を意味する⁽¹⁰⁾。

ヒロシマ・ナガサキ

「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ヒバクシャ」は、今日の原水禁運動の合言葉であり、目標であり、原点である。1978年5月から6月にかけて国連史上はじめて「国連軍縮特別総会」が開かれた。戦後の原水禁運動史上、ひとつの大きな転機となったにちがいない。国連に核兵器完全禁止を要請する3,500万人の署名を得て、国連本部では、被爆写真展を開催することに成功した。戦後30余年、アメリカ人はほとんど原爆投下の悲惨さについて知らされていなかったようで、彼らに与えたショックは大きかったようだ。彼らにとっては異常なほどの日本人の核アレルギーは、唯一の被爆国である故に他ならず、この真の姿を写真展等によって知らしめた効果は大きいといえよう。

ヒロシマ・ナガサキに対する原爆投下の真相は戦後かなり解明されてきた。トルーマン大統領は1945年8月9日に、「われわれは戦争の苦しみを打切るために、また幾千人というアメリカ青年の生命を救うために、原爆を使用した」と語った⁽¹¹⁾。確かに原爆の使用によって戦争終結が早まったと言えようが、そうした単なる軍事的理由からのみでなく、アメリカが戦後の対ソ外交に勝つために、

つまり国際政治的理由から原爆を投下したことは歪めない事実であろう。しかも根底には、人種差別にねざす偏見—白人優越主義—があったと言えまいか。

77年に引き続き78年の原水禁世界大会は統一的に開催された。久しく政治的対立等によって分裂状態であった大会が、少なくとも若干の対立点を残しつつも統一的に開催できたことは、30余年の“風化”の時代に新たな原水禁運動の起点になってゆくにちがいない。しかし日本人のみが「被害者」であったわけではあるまい。確かに多くの死傷者があり、今なお苦しむ被爆者がいる。日本人が原水禁運動の基盤を「被害者」に立って、原水禁を叫んだとしても、はたして十分に説得力をもちうるかどうか。アジア諸国に対する侵略は、「加害者」として多くの「被害者」を生み出した。そうした意味で「日本人が自らの犯した戦争犯罪を卒直に反省し、それをくりかえさないことを、『みな殺し戦争』の犠牲者に誓うことなしに、反原爆を叫んでも、その声は空しく消えて行くだけであろう。自らへの反省のみが、原水禁運動の統一と、核廃絶への道である」⁽¹²⁾という今堀氏（広島女子大学長）の示唆は、原水禁運動の基盤は何に根ざされるべきかをおしえている。

日本現代史におけるヴァンダリズムの主要なものに、アジア諸国に対する侵略、みな殺し戦争とりわけ幾多の虐殺事件があげられよう。また戦後史のそれには、公害があげられる。水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそく、スモン病、カネミ油症等の公害、加うるに様々の大気汚染、騒音、合成洗剤、食品添加物等、有害物質と環境破壊が高度経済成長とともに拡大した。最近におけるヴァンダリズムには三里塚がある。全くなしくずし的に強行開港したが、それは農民の生活を破壊し、あわせて民主主義に挑戦したものであった。機動隊員のものものしい光景は、日本に戒厳令がひかれたのかという錯覚をうけるほど異様であった。紙面の都合上、これらを詳細に扱えないのは遺憾であるが、いつか良い機会を得て、詳しく述べてみたい。

第三章 現代のヴァンダリズムに対する抵抗

—その基本理念—

ヴァンダリズムに対する抵抗は、結局のところ

「危機の認識」に他ならない。現実が起こり進行しつつある危機は、自由権や生存権、教育権といった基本的人権を犯しているかもしれない。あるいは文化を荒廃させ破壊しているかもしれない。いや核兵器に至っては、人類の全ての文化を、営為の諸々を破壊しつつそうとしているのである。「平和」に安住し、危機の認識がうすれ、価値観が多様化した今日、現代のヴァンダリズムは巧妙に浸透しつつある。ますます生活が困窮し、将来への不安が高まり、教育の現場では反動化がすすむ。こうした基本的人権の侵害こそ、最大のヴァンダリズムと言えよう。

羽仁五郎氏は「現代がアウシュヴィッツの時代である事実は直感である」（アウシュヴィッツの時代、S48）と述べている。日本軍国主義に対する闘争、とりわけファシズムについて言及しているが、ファシズムとてヴァンダリズムにかわりはなく、そのために第二次大戦でいったいどれほどの血が流されたことであろう。羽仁氏は「現代」の「事実」を「直感」し、これに抵抗し、これを阻止しなければ、行きつくところは「強制収容所アウシュヴィッツ」だと警告している。敗戦による経済的打撃、ニヒリズムの蔓延、こうした条件に支えられてナチス・ドイツは政権を獲得し、やがて人類史上残酷きわまるユダヤ人殺害を行い、世界中を戦争の渦にのみこんだ。伊太利においても日本においても、経済恐慌、独裁化が進行し、それに反対する者は「非国民」としてきめつけられ、やがてヒロシマ・ナガサキにおける幾多の犠牲をしいられて敗戦へとつきすすんだ。

現代のヴァンダリズムに抵抗し、阻止しうる主たる視点として基本的人権⁽¹³⁾の保障をあげることができよう。特にこれは近代的市民的権利として、日本国憲法においても明記されているものである。市民革命におけるブルジョアジー思想の拠り所は、自然法から説明される社会契約説であり、彼らの諸権利は市民的権利として各国憲法や独立宣言に明記されるに至る。「人間は法の下に自由で且つ平等である」という基本理念は、封建制を打倒し資本主義社会を生成・発展させるうえに重要な貢献をはたした。しかし資本主義社会の矛盾が露呈し激烈を加えてくるに至り、自由と平等は形式的になり、むしろ自由権は侵害され不平等が広がる。アメリカが1776年7月6日英国から独立したその宣言文には「われわれは、自明の真

理として、すべての人は平等につくられ、造物主によって、一定のゆずりわたすことのできない権利が与えられていること、この権利のうちには生命、自由および幸福の追求がふくまれていることを信じる」とうたわれ、「革命権」をも承認している。しかしそのアメリカは、内にはインディアンの迫害、黒人差別等、外では植民地主義ベトナム戦争などの対外侵略、核兵器による威嚇等の諸問題をかかえてきた。そこには、もはや独立宣言とはかけはなれた白人優越主義の帝国主義的国家になりはててしまっている。ニクソンが独立200年を祝う大統領になるべく、ウォーターゲート事件をひきおこしたことは実に象徴的だったと言えよう。

さて資本主義社会における基本的人権は、ブルジョア市民革命の時代までさかのぼることができる。もはやアメリカが独立宣言の主旨を忘れてしまったように、今日の資本主義的基本的人権には一定の限界があることが露呈してきている。つまり、明文化された基本的人権には、例えば搾取の自由、差別の自由といった「自由権」、経済的不平等といったものを、法律上（憲法上）認知するという形式をとっている。結局このことは、ブルジョアジーが市民社会をうちたてて自らの権利を認めさせていった本質に他ならない。従って資本主義社会における基本的人権には、一定の限界を有するものであり、完全な自由と平等を獲得する

ためには、この限界をこえなければならないであろう。しかし、少なくとも今日においては、一定の限界を有しているにもかかわらず（実はこのことが重要なのであるが）、形式的にしる自由と平等は達成しうるものであろう。つまり、終局的にはその限界をうちやぶって新しい社会を形成する必要があるが、その限界内でも自由と平等の達成すなわち基本的人権の獲得、擁護、保障を求めることは可能であり必要なことである。いや、資本主義社会であるからこそ、そうしなければならない。

例えば、差別問題とは、「基本的人権が侵害され、とくに近代社会における原理として何人にも保障されている市民的権利と自由を完全に保障されていない」⁽¹⁾ことであり、水俣病や四日市ゼンソク等の一連の公害病も、生存権（生活権）、環境権の侵害であって、ヴァンダリズムに他ならないのである。

ヴァンダリズムとは基本的人権の侵害であり、危機の認識によって把握され抵抗され阻止される。その基本理念が、基本的人権の擁護である。認識の主体は、自ら労働を行い生活する個人である。自らの労働の中に、生活の中に、ひいては社会の中に、進行しつつあるヴァンダリズムを認識し、これを阻止しなければ自らの人権は、生活はおかされ、つきるところ「滅亡」することになる。

(注)

- (1) 芝田進午氏は、「現代文化論の課題」（唯物論 9所収、1978/5、汐文社）の中で、文化絶滅・反文化として Vandalism をとらえ、文化における疎外と破滅を展開している。
- (2) 「現代の問題性」（岩波講座「現代」1）特に、「Ⅱ 現代とはなにか」（古在由重）参照。
- (3) K・スモーレン「アウシュヴィツの悲劇」（柳原書店、S44）、ワード・ラザフォード「虐殺アウシュヴィツ」（サンケイ新聞社、S50）参照。
- (4) 菊地昌典編「ソビエト史研究入門」（東京大学出版会）参照。
- (5) 芝田氏は、ベトナム戦争を、国際法的にみて、はたして「戦争」であったのか、と疑問視し、ベトナム戦争は、アメリカ憲法の条項にてらしてみても、非合法であり、法的には「戦争」とは言えない、と述べている。「ベトナムと人類解放の思想」（大月書店、1975）参照。
- (6) 小山内宏「ヴェトナム戦争」（ミリオンブックス、S40）、亀山旭「ヴェトナム戦争」（岩波新書、1972）、バーチエット「十七度線の北（上・下）」（岩波新書、S32）、川本邦衛「南ヴェトナム政治犯の証言」（岩波新書、1974）芝田進午「ベトナムと思想の問題」（青木書店、1972）参照。
- (7) B・ラッセル「常識と核戦争」（理想社）p.32参照。
- (8) 詳細な資料として、ストックホルム国際平和研究所編「世界の軍備」（核問題シリーズ「1」、原水爆禁止資料センター訳・発行）を参照。データに基づいて、世界の軍事支出、核拡散、軍事衛星等を説明、核問題シリーズ「2」として「第一撃態勢」がある。

- (9) B・ラッセル「常識と核戦争」p.13参照。
 (10) 芝田進午「現代の課題1」(青棲店)参照。
 (11) 前田寿「核時代の軍縮」(潮出版)参照。
 (12) 「講演内容には、日本人としての反省がまったくふくまれず、人類を告発するという姿勢に終始している。こんな考え方で、国連に出ていくことは、人間としての『思想』に欠ける行為だと思われる。」と今堀氏は、国連における田中里子さんの講演を総括し、「原爆を告発するものは、三光作戦などを、ほおかむりで済ますわけには行かない。まず日本人としての非をわびた後、人類に警告を発すべきではないか。」と、原水禁運動の姿勢を問題にしている。「国連軍縮総会と日本人の思想」(「広島通信58」所収、1978/7)参照。
 (13) 芝田氏は、基本的人権の体系を、マルクス主義の立場から、「生きる権利」からはじまる派生的体系的諸権利を把握して、資本主義的基本的人権の体系とは異なる体系の再構築を試みている。「ベトナムと人類解放の思想」151ページ～184ページ参照。
 (14) 原田伴彦「被差別部落の歴史」(朝日新聞社、1975) p.382参照。

自由投稿

ゴンズクとパトス

—二つの好きな言葉から—

情報行動科学コース3年 藤野常信

○^{●●●}老いた後は死ぬしかない

まったく乱暴な言葉である。しかも、これが授業中に、中学校の先生が言ったものであるからますます乱暴だ。野蛮人の言葉である。「老いた後は死ぬしかない。」悟りの言葉にも聞こえるし、やけっぱちのようにも聞こえる。明日のため、明日のためと今日を犠牲にしつづけたあげく、やっと明日に追いついたと思ったら明日は死んでいた。悲しいじゃないか、悲劇だね、ああかわいそうと笑う。カラッ、カラッのことば。

○^{とことわ いのち}永遠に生命生きよと

飯盛嶺は我らを招く

昔は、生命が生きるやなんてアホな歌詩やなんて思ってたんや。しやけど人並みに人生の意義な

んで洒落たこと考え出したときや。当然のことやけど答なんて出るもんやあれへん。えらい哲人でさえ、ちっともよう出せへんのやからしょうがあれへん、と^{ケツまくれば}ええもんを意義がないんやったら死のかとクソ真面目に考えてしても、さあやろかとしたとき、この歌を思い出したんや。文法的に正しいかどうかよう解らへんが、第一句を「永遠に生きたとしても」って勝手に解釈した。つまりやな、人間なんて下らん無意味な生物は、はよ死んだ方が大自然にとって善であるんやのに、それにもかかわらんとたとえ^{おそ}遅死んでも、故郷であることだけで飯盛山は許してくれはる。愚かしいが、それ故に賢い母のようにそのまま受け入れてくれはる。そやったら生きたろやないか。おもっきり、いきよく生きたろやないかと考えたんや。

〈総科生に対する嘆願状〉

諸君らは、こんな無礼な嘆願はないと憤慨するであろうし、実際変な嘆願文になってしまった。

一般的な評価からすると僕の仲間連中は、一風変わった連中とされるらしい。一風変わった連中の一風変わった遊びとしないために、次の企画にまっとうな人々に加わってもらい、まっとうな企画にしたいと嘆願するのである。

企画を列記すると

一、ダベリコンパの復活
 二、旧制広高生の生活史の記録
 である。ダベリコンパとは、北杜夫氏に言わせると「旧制高校のもっとも有意義な点は、このダベリにあったらう。」となる。総科創立の一つの目標として旧制高校の良い所を持つ学部を創ることがあったはずである。この旧制高校の最も良い点がダベリコンパであるならば、これを復活さ